理研会報

発行
印旛研理科研究部
事務局
成田市幸町948の1
成田小学校内

理研会報百五十号発刊にあたって

理科研究部長　酒井小　川勝　丸重

印旛研理科研究部の機関紙「理研会報」も、第一五〇号の発刊となりました。本研究部のすばらしい発展と充実の歴史と伝統を証明するものであります。

創刊は昭和四十年、当時の研究部長は板橋義夫先生（印西町教育長）副部長は牛嶋竹利先生（八千代台小校長）藤崎正雄先生（元竹袋小校長）幹事に飛田育男先生（印南小校長）武藤喜正先生（公津小校長）で、各部会長は一部会は五味健先生（印旛出張所指導主事）二部会は中村欽哉先生（成田市教委次長）三部会は穴沢鉦治先生（白井一小校長）四部会は古谷弘先生（印旛出張所社教主事）と記載されています。

編集には、現在と同様研究部幹事があたり原稿依頼から割りつけまで大変御苦労なされたことと思います。筆耕印刷は鉄筆使いの名手中村先生が毎号読みやすく届けてくださいました。記事については、主に理科研究部のベテラン先輩、毎日の授業のおこなっている小中学校の理科指導の先生方の実践的な生の声で、すぐに活用できる具体的な実験観察の方法であり、お宝なデーターである場合等が、現在に引きつがれているといえましょう。

またベテラン先輩が永年ひとりでこつこつと植物栽培で苦労してきた話、理科主任の理科実験室内の活用方法の工夫、学校栽培園観察池の紹介、自作器具の紹介等、多面的で図示入りであることが一層わかりやすく、どこの学校の誰々先生とお顔を想い浮かべながら内容を読ませていただくと親しみやはげみが満ちあふれてきたものです。

一研究部の機関紙で、一五〇号十九年間も続いていることは他では考えられないことであり、これを今まで支えてきた力は「すぐ現場で誰でも活用できる」ことを、モットーに発刊されてきた理研会報の初期の姿を持続してきたためものと考えます。理科研究部を支えている力は、理研会報を続刊させていく力は、先生方一人ひとりの理科教育を愛する心と研究をしていく意欲だと信じています。一五〇号、三〇〇号の発刊を期待しています。

会報発刊の趣旨を見つめ直す。

第五十号発刊当時の部長　成田小　飯田　和幸

理研会報第一号が昭和四十年に刊行され、二十年間に渡り研究部活動の糧となり、ここに第一五〇号の発刊を迎えています。これも編集刊行に当った歴代事務局の熱意と、皆さんの理解と協力が守り育てて来たものと思います。今、理研会報発刊の経緯を回想するに、平易で親しみのもてる、理科、を願い、充実を研究活動の活発化に求めたものです。理解と協調は身一歩の感が強く、対話と交流の場を大切にする働きかけが話題となり、協議検討され会報発刊に結び付いたことが想起されます。

趣旨に「科学する目を大切にし正常に育むため共に学ぶ」を柱に。会報は、対話と交流の場であり よりどころであること。

。会報は、個々の研修、研究活動の資料提供を配慮すること。

。永続的な刊行を維持すること。等の検討内容が記憶に残ります。

ここに理研会報発刊の経過と共に、研究活動の推移にかかわりの深い団体の結成と変革の流れを見る昭和初期に於ける教育現場の中核は「教育会」の名称で、傘下に、部会制の地域区分をもった。昭和二十年代、民主主義への急転が、「教職員組合を誕生」。次いで、学制施行の翌年「印旛支部」の結成で、研究活動と対比的に見る。

理科研究の実践と実績はすばらしい年輪をもつ、同好会の運営は、昭和八年頃の発足と聞く。二十年代初めの混沌とした時代は教育の維持に止まり、研修は凋落する。学制施行後復調し輝かしい足跡を身に伝える。その活動は、混乱と物資の欠乏が教員教材の調達や自作教具等、教師の努力にかかり献身的な努力と熱意が補う。内容は、。ローカルプランの編集、。観察実験用具の自作研修、。製作技術の修得等、資材の収集にリュックを背負い東奔西走、子どもと共になげ励んだ時代です。当時印旛支部には文化部なる独自母体をもつも、実質的な活動の視点から、呼び名を、同好会、研究部と使い分けたものです。会報発刊の翌年に名実共に研修を司どる、印旛研、千教研、が手順よく結成されました。

（内面に、国と県の補助―詳細略）

総合的な研究団体の誕生です。印教研結成の当地区は従来の流れから、各部と異なり、組織と運営が体質的に変則的で検討の声が高い。

教育現場は、教育制度の改革を諮問し、二十一世紀に向けてその歩みも大切な岐路を迎えている。

一こと添えるならば、研究の組織がなく同好会にゆだねた時限も過ぎて、ここに研究部活動二十年その役割の大切な時期でもある。組織に活力を得させ、先の同好会のルを範とし、地区別、分野別、研究問題別、に研修計画を組み立て運営の調整を明確にして、

。同僚どの研鑽の場に、。初任者の学ぶ場に、。技能の習得の場に、上げて、「同一歩調の体制作りと、運営充実を期する。」ときではあるまいか。時に、各教科の研修に同好会開催などの声を聞くが、所属研究部活動の正常な運営と効率化を育み、筋の通、た協調と配慮に心がけ研究部組織を生かし、落ちのない指導力の向上を計る運営の大切な教育現場の実情であろう。

理科も同様に、会報発刊の趣旨を生かし、理科研究部活動の益々の充実と、その大きな成果に期待をよせて、項を終ります。

会報100号によせて

第百号発刊当時の部長　白井一小　穴沢　鉦治

昭和53年7月10日号をもって会報が百号となりました。

研究部ではこの号を記念号とする特別企画をたてました。

新聞のような印刷で、大きさもそのようにする。写真も入れようということでした。中でも二面・三面を会報についての歴代研究部長の座談会をのせることになりました。出席された方は、

板橋義夫先生　成田小学校長
飯田和幸先生　東葛出張所長
藤崎正雄先生　六合小学校長
穴沢鉦治　研究部長

他に幹事の佐藤幸納先生、出張所から武藤喜正先生等にも参加を頂きました。

司会は、私穴沢がいたしました。

理研会報創刊時の研究部長の板橋先生に、まず「当時を回想して」……と水を向けますと、

板橋先生は、「話しを始める前に一言申し上げたい。それは、この会報がこんなにも長く継続され、内容もますます充実して百号を迎えた事、実に私にとっては感激です。実のところ、会報を発行しようという案の出た時、まあいいだろうぐらいの気持ちだった。それがこんなにも成長している、研究部の皆さんに本当に感謝の気持ちでいっぱいです。」

板橋先生にしては珍らしく感情のこもった発言でした。

歴代部長一同は一斉に思わずしんみりしてしまいました。

おそらく胸中を去来するものは、板橋先生と同感のものがあり、よくぞここまで……の感深きものがあったからでありましょう。

それから、戦争直後の物資欠乏時代の自作教具作成時代の苦労話、実験を取り入れる授業を奨励した歩いた時代、思考力・創造力の育成、問題解決学習全盛時代等 会報となるせていろいろな話に時間をすごしました。

長い事が必ずしも功多きことは言い切れないが、ともかくもこの灯を消さない努力を期待しつつ座談を終了しました。会報が充実し100号まで伸びた事に感謝申し上げます。